平成7年度(1995) 個展を前提とした作品制作研究(13)

第13回個展・茶絵羅 in Naha

金城 満

1. 展覧会名:

金城満展 -シリーズ「電脳水脈」-

2. 趣旨:

コンピュータの発達による過剰なまでの情報と、個人の認識の是非に関係なく潜伏 化した個人情報の形象化がテーマである。

3. 材料技法

和紙、インク、ジェッソ、水彩、箔

4. 展覧会場

アートギャラリー茶絵羅

5. 展覧会期

1995年10月02日(月)~14日(土)、8日(日)は休み※12日間

6. 開館時間

10:00~19:00

7. 観覧料金

無料

8. 企画

アートギャラリー茶絵羅

9. 作品リスト

No.	作品名	サイズ(cm)	材料	制作年月	備考
192	シリーズ「電脳水脈」01	32.0 x 20.0 cm	和紙、インク、水彩、箔	1995 年	第13回個展
180	シリーズ「電脳水脈」02	27.0 x 20.0 cm	和紙、インク、水彩、箔	1995 年	第13回個展
179	シリーズ「電脳水脈」03	25.0 x 20.0 cm	和紙、インク、水彩	1995 年	第 13 回個展
190	シリーズ「電脳水脈」04	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
188	シリーズ「電脳水脈」05	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ水彩、	1995年	第 13 回個展
			箔		
187	シリーズ「電脳水脈」06	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
194	シリーズ「電脳水脈」07	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
189	シリーズ「電脳水脈」08	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ水彩、	1995年	第 13 回個展
			箔		
193	シリーズ「電脳水脈」09	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
181	シリーズ「電脳水脈」10	60.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
186	シリーズ「電脳水脈」11	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
196	シリーズ「電脳水脈」12	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第13回個展
195	シリーズ「電脳水脈」13	35.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
184	シリーズ「電脳水脈」14	60.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
183	シリーズ「電脳水脈」15	60.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
182	シリーズ「電脳水脈」16	60.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第13回個展
197	シリーズ「電脳水脈」17	35.0 x 22.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995 年	第 13 回個展
199	シリーズ「電脳水脈」18	30.0 x 40.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩、	1995 年	第13回個展
			箔		
198	シリーズ「電脳水脈」19	30.0 x 40.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩、	1995年	第13回個展
			箔		
191	シリーズ「電脳水脈」20	40.0 x 30.0 cm	和紙、インク、水彩、箔	1995 年	第 13 回個展
185	シリーズ「電脳水脈」21	60.0 x 20.0 cm	和紙、インク、ジェッソ、水彩	1995年	第13回個展

10. 関連イベント

11. 考察(報道等資料) (pp. 17-19)

(1)沖縄タイムス 1995. 10.06 展覧会から 金城満展 -シリーズ「電脳水脈」-

(2)琉球新報 1995.11.08 10月美術月評

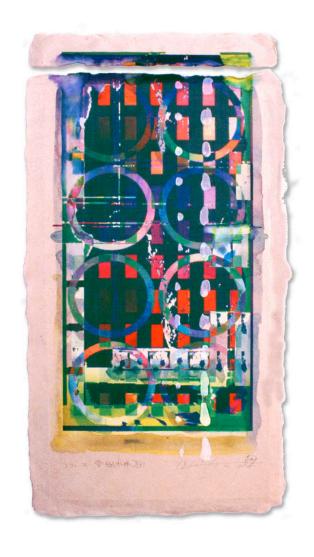
情報過多時代を形象化 (県立芸術大学助教授 浅野春男)

(3)沖縄タイムス 1995. 11. 25 10 月美術月評

(那覇市文化協会事務局次長 佐藤善五郎)







電脳水脈11 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩

電脳水脈06 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩





電脳水脈05 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩

電脳水脈08 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩





電脳水脈O4 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩

電脳水脈09 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩





電脳水脈07 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩 電脳水脈13 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩





電脳水脈12 35.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩

電脳水脈01 32.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、水彩、箔





電脳水脈02 27.0 x20.0 cm 1995年 和紙、インク、水彩、箔

電脳水脈17 35.0 x22.0cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩



電脳水脈19 30.0 x40.0 cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩、箔







電脳水脈10 60.0 x 20.0cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩

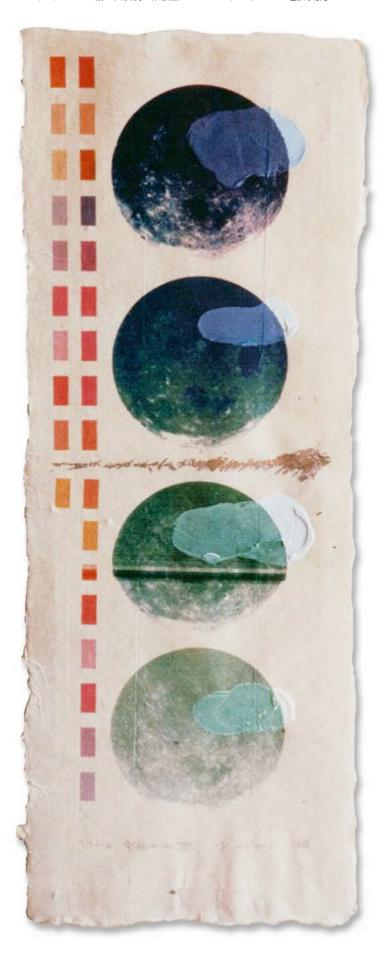
電脳水脈16 60.0 x 20.0cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩





電脳水脈15 60.0 x 20.0cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩

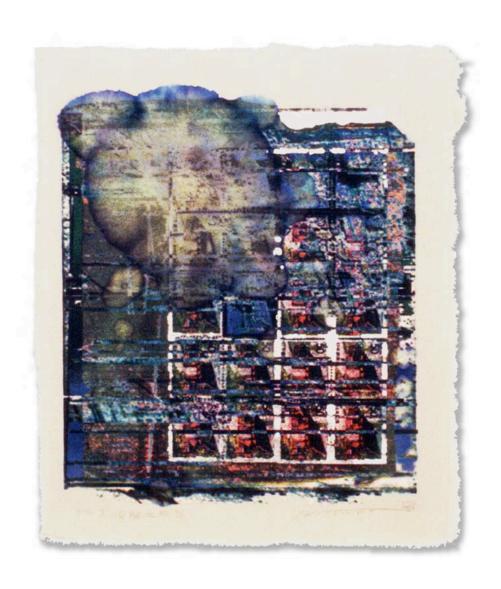
電脳水脈14 60.0 x 20.0cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩



電脳水脈21 60.0 x 20.0cm 1995年 和紙、インク、ジェッソ、水彩



電脳水脈20 40.0 x30.0 cm 1995年 和紙、インク、水彩、箔



電脳水脈03 25.0 x20.0cm 1995年 和紙、インク、水彩

沖縄タイムス

(1995) 年10月06日 平成7年

「大皿」

催されている。南蛮焼には難しい 那覇市の沖縄三越ギャラリーで開 大作を多く紹介した作陶展。九日 今月、ちょうど五十歳の誕生日 陶芸家・大嶺信孝の作品展が、

の多彩さを見せた展覧会となっ 緑、グレー、ベージュ色の釉薬が の黒に向かってブルー、オレンジ イメージだけではない「大嶺陶器」 機会に、これまでの南蛮一辺倒の を迎えるという大嶺さん。これを 直径約七十珍級の大皿は、中央

る角度から別の表情を引き出し うに木の葉の葉脈が焼きつく同作 碗」も展示。茶碗の底に刻印のよ の炎で絵を描く。炎の動きをそ のスパイス的役割を担って作品の 品が、多彩な作品を出品する同展 の葉を練り込んで焼いた「天目茶 のほど復活させたという、土に木 ゆがんだ造形とマッチしてあらゆ ふれる陶器の色が、陶器自体の のまま壺に写し取った躍動感あ つひとつを一層印象づけてい そのほか、二十年前に発表して

1礁の海を連想した」というこの 形状に層をなしている。「サン

◆金城満展(アートギャラリー

シリーズ。今回は、出品された サエラ、~14日) 催した「電脳版画展」に続く電脳 - 点の作品すべてに「電脳水脈」 昨年、ギャラリーワーク日で開

現しているようでもあり、印象的 作品は、大嶺さんの宇宙観を表

し、陶器をより親しみやすくして きな作品独特の威圧感を払しょく きたゆがみ=「壺の年輪」は、大 ぎ目。それをあえて残すことでで だ形が特徴。これは大作の壺を三 にもかかわらずどことなくゆがん -四日かけて制作する際の継 **壺作品は、ロクロを使っている** という題が付けられている。

この壺のキャンバスに、窯の中 作業』という言葉が、同作品群の 説明する。 わき出てくる思考を『水』に置き 換え、自分の中の水脈を確認する 城満さんは「『その脳の表面から に例えられたコンピューター。金 表現に一番近いかもしれない」と 電脳は、人間の脳(=有機体)

う動くか分からない一方で、しか し、それによってコントロールさ しその源となる水脈は必ず存在 人体、漢字、円などをモチー 水は制御できない、どこにど

ギャルリーパレ、~30日) 脳、と融合する、水脈、を表現し フにしたコンピューターの印刷 に、水彩絵の具をにじませて『電 ◆ギャルリーパレ展 (キャフェ

リーパレー年に一度の公募展を開 浦添市安波茶のキャフェギャル



金城満作品「電脳水脈」

催している。 プロ・アマ問わず美術作品を持

ち寄り、参観者の投票で受賞作品

を決める。 い、一般の参観者と作品の触れ合 大公募展の審査員たちとは違

ている。 パーティーが開かれる。 三十日まで。翌三十一日は、受賞 せき、沖展などの入賞者たちも新 いを目的にした同展には、りゅう い創作の実験の場として出品し 今年は二十二点が参加。投票は



当真政次郎作品「2人」 ギャルリーパレ展から

17

王求

文化

リもまた、展覧会を鑑賞するの

地域における美術活動を歴史とし

況をみせているのであろうか。 る国民的な称賛と愛好のゆえに盛 とも近代絵画の父セザンヌに対す に予約が必要になったのか、それ 約のチケットがないと入れない。

点が展示されており、午前中は予

捉えどころない時代感覚

水彩・デッサン合わせて約二百

が似合うだろうか。パリのグラン

深まりゆく秋には、どんな芸術

は、大変充実した一カ月であった。

バレでは大規模なセザンヌ展が開 **₱した(来年一月七日まで)。油彩**

10月

THE PRINCIPAL STREET

浅野 春男

青野正

風坡

FLORANa 6

渡名喜元俊

穏やかな風景画がたいへん好まし ざなう美酒のごとき油彩画であっ たわる裸婦」も色彩の酩酊へとい く感じられた。ルノワールの「横 さて、沖縄の十月もある意味で

まった「戦後五十年沖縄の美術家 とりわけ那覇市民ギャラリーで始 展」(十一月五日まで)は、八月に る。 会的·経済的·思想的·宗教的背

浦添美術館で開催された「沖縄戦 景などのさまざまな要因が絡み合 ふたつの展覧会は芸術を学的に対 言うまでもなく、芸術作品は社 沖縄の近代美術を歴史として捉 (とら) えることができる。この

のような意識に立って、はじめて、 青野 立こそがたとえば県立美術館構想 た。こうした美術史学的視点の確 みとして特筆されるものであっ るまで、美学・美術史を専門的に 象化する沖縄でほとんど最初の試 えば、沖縄には残念ながら今に至 の充実には必要となる。さらにい 沖縄市の花屋で開催されたあまり

にも小さな個展であったために、

ば渡名喜元俊の一フローラ」展は

そうした視点に立てば、たとえ

の時代的形象を表現しようと努め

評価したい。野外展と比較すれば、

ている。だが、たんに時代の流れ

術の創作と鑑賞に役立つだけでな のである。理論と歴史の理解は芸 で最初の美学・美術史分野での専 ると考えられるからである。 く、それは文化を育てる指針にな 門教育研究機関として画期的なも に開設された芸術学専攻は、沖縄 かった。したがって今年県立芸大 研究する高等教育機関が存在しな フェの片隅にちぢとまって満足し るような意気込みを望みたい。カ いだろう。ただ、私としては、彼 てイメージを重層的に重ね合わせ ずれも、ミクスドメディアによっ も同じような気持ちを抱いた。 て欲しくないのである。金城満展 た作家であることは指摘されてい ていくことで、私たちの情報過多 に全身全霊をつぎ込んだ大作を作 (ギャラリー・サエラ) について

名喜が数少ないコンセプトをもっ 見逃されがちであるけれども、渡 説得させずにおかない力があるよ れた。ひとつのテーマを一貫して あった。作品の評価は個々の鑑賞 間喜宏・大城實清・大浜用光)で のか、それとも「自己」の側から 追求する姿勢には、何か私たちを の一貫性ということを考えさせら 者に委ねるとして、私は創作活動 サロン・ド・ミツの「三人展」(城 ところである。 いるのか。その曖昧さが気になる 発信する何物かに賭けようとして もうひとつ注目すべき展覧会は

うに感じられた。 観ていけば、それな 作品をひとつひとつ 「街と彫刻展」は、 第四回目を迎えた カルロス氏村の作品と比較すれ強く陽気で健康的な造形を示した 逸だからである。そのことは、 ろのない存在感覚の表現として秀 の造形は私たちの時代の捉えどこ 村がモダニズムの論理のなかに見ば、もっとよく分かるだろう。氏 された一種迷宮ふうの荒廃と不安 を抱いた。なぜならば、こごに示 のような作品の方により強い興味 たのに対し、青野の弱々しく、 事に古代的な大地の歌を形象化し ては、たとえば青野正の「風壊 私とし

に身をまかせて、世界を構成する 粒子と化することを望んでいる るといえよう。ところで、 かがえるモダニズムの領域内にあ ものに高度な感覚の喜びをあたえ はさわやかな近代造形として観る 方がまとまった印象を与える。 ており、その思想的位相は奥田実、 戸修の「スパイラル・リング#3 招待作家展(リウボウホール) 山崎哲郎、橋本夏夫らの作品にう

供してくれる流派としては、印象 くつかの秀作をみることができる 印象派展」(セゾン美術館)でもい だろう。セゾン美術館では、私の 主義がこれからも人気を保つこと し、あまり難しいことを言わない みるところ、ピサロやシスレーの 東京で始まった「印象派・後期 絵をみる楽しみを私たちに提 二元性、地平線、何を捜して カルロス氏村か

て把握しようと試みた展覧会であ的な視点と論理が要求される。そ 後美術の流れ」展と並んで、このって誕生する。そしてそれらを歴 史的に把握するためには美術史学 力強く陽気で健康的 氏 コンセプト持った作家 情報過多時代を形象化



形、上原一明の誠実 ではない。丸山映の か、いさざか拡散し りに興味深いのだ 古島実の時代感覚を 滑稽と、三浦あかわ すぎたところがない 大城康の楽しい浩

(県立芸術大学助教授)

ムのうちに悲しく震えているから

直接的な、いわば精神のリアリズ ちが生きている危機の時代の最も びつき、喪失してゆく造形は私た

沖縄タイムス

平成7年(1995)年11月25日

